

次の——線部の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

- 1 水面下であれこれと画策する。
- 2 改善案の是非を問う。
- 3 事態の收拾を図る。
- 4 予算のむだを省く。
- 5 おぼれている人を救う。

次の——線部のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- 1 家のカドグチに立つ。
- 2 シンキ一転して再出発する。
- 3 障害物をジョキヨする。
- 4 空気中の有害物質をアびる。
- 5 富士山のイタダキに立つ。

えなさい。宿題を忘れた者、手を上げなさい。」

三、四人が B と手を上げた。益垣先生の大きな目がギロリと光った。

「なあんだ、また百姓の子ばかりだな。」

みんなうつ向いた。農家から来ている生徒は、宿題をしてきた者までうつ向いた。益垣先生は、宿題を忘れてきた一人ひとりを睨みつけていたが、

「権太、お前は今日も忘れたな。お前、一度だって宿題をしてきたことがあるか。学校へ来たら来たで、居眠りばかりして。」

井上権太は、耕作の隣家の子で、耕作と同じ沢の尋常科を卒業し、この春市街の高等科に入ったのだ。井上権太の母は、三月ころから産後の肥立ちが悪いとかで、C しているのだ。だから権太は、飯を炊いたり、赤ん坊のおしめを洗ったりしている。その上、母親の鼻仕事まで代わってやっている。

「権太、お前、お前の学校の先生は、宿題しなくても、居眠りしても、怒らなかつたのか。」

お前の学校の先生はというところに、益垣先生は力を入れた。耕作は、きつとして益垣先生を睨みつけた。益垣先生は時々、分教場の菊川先生を悪く言ったり、笑ったりする。

「権太、宿題は必ずしてこい。これからは、してこない者を残すかな。」

権太はうなだれて答えない。

「だいたいだ。権太は毎日のように遅刻する。一体、学校を何と思

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(ただし、抜き出して答える問題では、句読点等は一字として数えないこと。)

六月のさわやかな風が、教室を吹きぬける。今日は学校は二時間しか授業はない。一時間目は国語で、二時間目は数学だ。しかもその数学は、この管内の研究授業だ。受け持ちの益垣先生は、いつもより髪に油をつけ、剛い髪をべったりとわけている。詰襟のカラーも替えて、ズボンの膝もぬけてはいない。が、国語の授業はうわの空で、みんなに昨日の復習をさせ、何かいらいらしている。

「チヨークが揃っていないぞ。昨日の当番長は誰だ。」

「ハイ。」

立ち上がったのは、四列の一番うしろの若浜だ。若浜の家は雑貨屋で、金持ちだ。若浜を見て、益垣先生はちよつと困ったように微笑を浮かべて、

「何だお前か。これからは気をつけなさい。職員室に行つて、白いチヨークを十本、赤いのを三本、すぐもらつておいで。」

と、やさしい声になる。耕作の前の生徒が、隣の生徒を突ついた。二人は顔を見合わせ、うなずいている。

益垣先生は A と、教壇の上を行つたり来たりしている。まだ二十七の益垣先生は今日の研究授業が気になってならないのだ。と、

「復習やめ。」

先生は机に片手をおいて言った。

「これから昨日の宿題を調べる。みんな隣りの者と、帳面を取り替

つてる。お前たちの菊川先生は、学校は遅れてはならんと言つたことがなかつたのか。」

また菊川先生が出た。宿題を忘れた他の子には何も言わず、権太にだけ益垣先生の叱言がつづく。

「百姓というのは、学校の大切さを知らん。学問の大切さを知らん。それを知らせるのが、先生の役目だ。一人ぐらい成績のいい子をつくつたつて、何の手柄にもならん。」

ちらつと、益垣先生は耕作を見た。耕作はうつむいた。

(あれは、俺のことだ。)

小学校しか出ない菊川先生の教えた生徒たちは、町の生徒に、決して学力は劣らない。しかも今年は、事もあるうに耕作が旭川中学に一番で合格した。益垣先生も三月まで六年生を受け持っていたから、そのことがよほどくやしいのだろうと思う。

「権太、今日は罰として、お前一人で掃除当番をすれ。」

耕作は唇をかんた。

(ちきしょう。)

菊川先生に六年間習つていて、先生に対して「畜生」などと思つたことは一度もない。益垣先生は北海道庁の官員の息子だそうだが、菊川先生は、耕作たちと同じ沢の、農家の次男坊だ。第一、宿題などほとんど出さない。農家の子供たちが、朝早くから夜遅くまで野良仕事に追われていることは、菊川先生自身がよく知っている。宿題をする時間など、誰にもない。居眠りをしたつて、起こさないし、むろん怒りもしない。

「昨日の草取りで、くたびれたんだべ。」

菊川先生はそう言ってくれたものだ。学校が遅れても、

「仕事のきりがつかなかったんだべ。」

そうも言ってくれた。それでいて教え方はいいできびしい。

ところが、高等一年になって、市街の学校に通うようになると、一分でも遅れると、すぐに殴られるか、立たされるかだ。益垣先生は遅れた理由を聞かない。遅れた者は寝坊したからだ決めてる。

「市街の者を見ろ、市街の者を。」

とよく言う。頭から市街の者がよくて、農家の者を怠け者と決めているようだ。

（第一、市街には電灯があるじゃないか。）

と、耕作は思う。明るい電灯の下では、宿題くらいすぐできる。うす暗い石油ランプの灯影で、一字一字確かめるように、教科書を読む必要がない。なぜ、益垣先生はそれらの事情に気がつかないのか。耕作は不思議な気がする。いくら、札幌に育った先生でも、ほかの先生ならもう少しわかるのではないか。漢字の書き取りをしながら、耕作は胸の中でぶつぶつと言う。

みんなが少し漢字の書き取りをしたところで、先生が教卓をパチンと鞭で叩いた。

「いいか、みんな。今日は外の町村の先生もたくさん見える。いつも先生が言っているように、姿勢をよくして、よそ見をせずに勉強するんだぞ。机の中を見る先生もいるからな。机の中も整理しておけ。」生徒たちは机のふたをあけて中を見たり、屈んで机の下にゴミが落

手の上がる数が少し減る。

「三十七足す七十八足す五十五。」

それでも半数の手は上がっている。つづいて引算、掛算、割算の練習をし、いよいよ応用問題に入った。

「石村君、一番目の題を読んでごらん。」

耕作はちよつと先生の顔を見てから、

「ハイ。」

と答えて、読みはじめた。

「三人の旅人が、二頭の馬に乗りて、十二里の道を行かんとす。三人が等しき距離を馬に乗るには、一人何里乗るべきか。」

耕作はいつもより低い声で読んだ。参観の教師たちが多くて、あがつたからではない。益垣先生が、いつものように石村と呼ばず、気取った声で石村君と言ったことにも、一時間目に井上権太を不当に叱りつけたことにも、承服しがたい、不快な感情を持ったからだだった。

「石村君は、いつもより声が小さいですね。ではもう一人、春浦君に読んでもらいましょうか。」

春浦は、声の澄んだ朗読のうまい生徒だ。春浦はいつものように、上手に読んだ。

「ハイ、よく読みました。どうかね、みんな問題がわかりましたか。三人で二頭の馬ですよ。三人に二頭だから、乗れない者が一人出る。いいですか。」

そう言った時、小永谷が、

「ハイ。」

ちていないかを調べたりする。耕作はそんなみんなを、浮かない気持ちで眺めていた。大勢の先生の前で、あくびでもしてやりたいような気持ちになっていた。

二時間目がはじまった。

益垣先生は極度に緊張していた。一時間目とは全くちがう表情である。級長の若浜が、

「礼！」

と、ややうわずった声で号令をかけた。益垣先生は、

「では、いつものように目をつむって、心を静めましょう。」

と、ていねいな語調で言った。益垣先生はいつものようにと言ったが、ついこの二、三日前からはじめたことなのだ。みんなは神妙に目をつむった。三十秒ほどして、

「よろしい。目をあけて。今日も元気で九九の練習をしましょう。」

「四、七。」

先生が言う。

「二十八。」

生徒たちは一斉に声を揃える。

「三、九。」

「二十七。」

練習がいつもより少し長くつづいて、次に暗算がはじまった。

「十五足す十六。」

手が上がる。

「二十六足す八十五。」

と手をあげた。【a】少し頭の大きいその子は、知能がやや低い。が、明るく親切な子だ。益垣先生は小永谷を一瞬見つめたが、無視して授業を進めようとした。【b】が、小永谷は、

「先生、二頭あれば、三人とも乗れるよ。おれ、馬に父さんと二人で乗ったことあるもん。」

参観の先生たちがどつと笑った。【c】益垣先生は苦笑して、

「確かに、乗れることは乗れるが……。」

益垣先生がそう言ったまま、絶句した。

「したら、乗せてやればいい。」

のんびりした口調で、小永谷が言った。【d】先生はハッと吾に返った。

「ま、一頭には一人しか乗せないという約束にしよう。みんなこれをどのように考えたらよいか、まず雑記帳に、書いてみて下さい。」

益垣先生は小永谷の発言で、次に言うべきことを忘れたのだが、生徒に考えさせることによって、忘れたことをごまかした。【e】何を言うべきかを思い出そうとして、益垣先生は眉根をよせて、じつと立っている。生徒たちは問題を読む者、すぐに鉛筆をとる者、隣りのノートをのぞきこむ者、さまざまである。耕作には、暗算でもできるやさしい問題だ。が、耕作は鉛筆も持たず、教科書も読まず、むっとしたまま先生の顔を見ていた。

「できた人は、手をあげてください。」

生徒たちは、大勢の参観者に気をまわしたのか、手をあげる者は誰もいない。やみくもに、書いたり消したりしている者もある。

(権太なら、できるはずだがな。)

耕作は権太のほうを見た。だが権太は、一生懸命問題を読んでいくようだ。

(権太は一時目元に叱られたからな。頭に入らないかも知れないな。)

耕作はそう思いながら、権太のうしろ姿を眺めた。

「できた人は、手を上げてください。」

再び益垣先生が促した。

二、三人の手が上がった。が、指された生徒はまちがっていた。この問題ができなければ、先生の授業は進まない。

「級長の若浜君はどうだ。」

「わかりません。」

みんなができないのに焦った益垣先生は、

「石村君、君はできたでしょう。」

「できません。」

耕作が答えた時、うしろで突ついた者がある。ふり返った耕作はハッとした。菊川先生だったのだ。

D

一瞬のうちに耕作は

「いや、できました。」

「できた？」

ホッとしたように先生は言い、

「では、どのようにしてできたか、黒板に書いて、みんなに説明してください。」

耕作は言い返した。

(三浦綾子『泥流地帯』による)

*管内：役所の管理する区域内。

*尋常科：旧制の初等教育が行われていた小学校。

*高等科：尋常科卒業後に通う高等小学校。

問一

□ A・B・C に入ることばの組み合わせとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|
| A | A | せかせか | B | おずおず | C | ゆるゆる |
| イ | A | うろうろ | B | ぐずぐず | C | ぶらぶら |
| ウ | A | いそいそ | B | しずしず | C | ぐだぐだ |
| エ | A | さびさび | B | ぞろぞろ | C | だらだら |

問二

——線部7「暗算」の「暗」8「承服」の「服」と同じ意味の「暗」「服」をふくむ熟語として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 7 | A | 暗示 | イ | 暗殺 | ウ | 暗号 | エ | 暗唱 |
| 8 | A | 元服 | イ | 制服 | ウ | 感服 | エ | 着服 |

耕作はすつくと立って、教壇のほうに歩いて行った。

耕作が黒板に式を書き、図を描いて、懇切に説明をしはじめたころから、益垣先生も落ちつきを取りもどし、授業は軌道に乗った。

菊川先生が見ていると思うと、耕作の学習態度ががらりと変わった。菊川先生が見てくださると思うだけで、心の中に喜びが湧いてくるのだ。

そのあと、益垣先生も、耕作の活発な学習態度に助けられて、後半の授業をぐつと盛り上げることができた。他の生徒たちもつられて、元気に挙手をした。

無事に授業が終わると、参観の先生たちは、そろそろと教室を出て行った。

参観の先生たちが全部出て行くと、益垣先生は小水谷を睨みつけて、「小水谷、お前のおかげでとんだことになるどころだったぞ。」

と言いい、耕作を見て、

「石村、よくやってくれたな。」

とほめ、

「今日はこれで終わりだ。いいか、当番は井上一人でやるんだぞ。先生はこれから、批評会に出なければならんからな。静かに帰れ。」

あたふたと先生が出て行くと、生徒たちはみんな、教科書をカバンや風呂敷に入れ、机をうしろに片づけて、吾先にと帰って行く。

耕作が権太に手伝おうと箒を持つと、級長の若浜が言った。

「先生に言つてやるぞ。叱られるぞお前も。」

12 「叱られてもいい。」

問三

——線部10「気をのまれた」11「やみくもに」のこの文章中の使い方と同じものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|----|--------|---|---------------------------|
| 10 | 気をのまれた | A | 周囲の人々の強い期待に気をのまれた。 |
| | | イ | 友人のおおげさな自慢話に気をのまれた。 |
| | | ウ | 思いがけない旧友の訪問に気をのまれた。 |
| | | エ | 相手チームの強い気迫に気をのまれた。 |
| 11 | やみくもに | A | 試合前の緊張からのがれようとやみくもに走りだした。 |
| | | イ | すれちがった見知らぬ人からやみくもになぐられた。 |
| | | ウ | 予想もしなかった悲しい結末にやみくもに泣きだした。 |
| | | エ | 少年時代を思いだすとやみくもになつかしくなった。 |

問四

——線部1「国語のゝいらいらしている」とありますが、この理由を述べている部分を「から。」につながるように、文章から十五字以上二十字以内で抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問五

——線部2「なあんだ」百姓の子ばかりだな」5「百姓というのは」知らん」とありますが、これらの発言から益垣先生がどのような考えを持っていると耕作は思っていますか。そのことを述べている一文をこれより後の文章中から抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問六

——線部3「農家からうつつ向いた」とありますが、このときの生徒の気持ちを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 農家の子どもであるとかそうでないとかいうことが、宿題をやったことないことに何の関係もないとうんざりしている。
- イ 農家の他の子どもが宿題をしてこなかったのに、自分だけやってきたことに対して引け目を感じている。
- ウ 農家の子どもだから劣っているというような言われ方をしたので、自分も怒られているような気がしている。
- エ 農家の子どもに対するいつものいじめがまた始まったと、冷めた気持ちで見ている。

問七

——線部4「益垣先生はう笑ったりする」とありますが、益垣先生がこのようにする原因となった具体的な事実を述べている部分をこれより後の文章中から十五字で抜き出し、その最初の五字で答えなさい。

問八

——線部6「大勢のうなっていた」とありますが、このときと同じような気持ちが現れた耕作の行動をこれより後の文章中から十五字で抜き出し、その最初の五字で答えなさい。

問十一

——線部12「叱られてもいい」とありますが、このときの耕作の気持ちを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 問題に答えられなかった若浜にはそんなことを言う資格はないと反発している。
- イ 今日の授業で活躍したのだから叱られるはずはないとたかをくくっている。
- ウ たとえ叱られたとしても菊川先生が助けてくれるにちがいないと信じている。
- エ 益垣先生のような尊敬できない先生から叱られても自分は何とも思わないと思っている。

問十二

次の一文が入る場所として最も適切なものを文章中の【a】～【e】の中から選び、記号で答えなさい。

近くで郭公が啼いた。

問九

——線部9「益垣先生がう絶句した」とありますが、このときの益垣先生の気持ちを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 予想もしていなかった質問にとまどってしまい、参観の先生たちが笑ったことで頭の中が混乱している。
- イ あまりにもばかげた内容の質問にあきれかえってしまい、参観者たちが笑ってしまったのではずかしくなっている。
- ウ どうしてそんなにくだらない質問をするのかと腹立たしく思い、授業進行のために発言を無視しようとしている。
- エ この発言をなんとかして研究授業に生かさなければならぬと思ひ、周囲のことが目に入らなくなっている。

問十

□Dに入ることばとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア できなければ自分の負けだ。
- イ できなければ菊川先生のはじだ。
- ウ できなければ農家の子が笑われる。
- エ できなければ授業が進まない。

問十三

この文章の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 職業のちがいが生まれ出る差別意識が、教育の場である学校の中にもいまだに根強く残っているという社会問題を、教室内で一人の教師と農家の子どもたちとのなげないやりとりを通じてするどく指摘している。
- イ 子どもたちの事情を理解しながら接してくれた信頼できる先生への思いと、子どものことを理解しようともせず自分中心に物事を進めようとする担任への反発を、研究授業の場面を通して対比的に描いている。
- ウ 農村出身の子どもたちと市街地出身の子どもたちとの間にある表面には現れにくい水面下の対立を、学校の中の日常的な出来事を題材にとりながら、おさえた筆遣いであざやかに切り取っている。
- エ 少年期の子どもたちに大きな影響を与える教師という存在がいかにあるべきなのかを、資質の異なる二人の教師の具体的な言動を並べることによって、筋道立ててわかりやすく説明している。

四

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(ただし、抜き出して答える問題では、句読点等は一字として数えないこと。)

全自動洗濯機を買い、はじめて使ったときは、「世の中にこんなに便利な機械があるのか!」とばかりに感動しました。ただの「自動」ではなく「全自動」ですから。洗濯槽と脱水槽が分かれていたそれまでの二槽式洗濯機とついつい比較してしまいます。二槽式洗濯機では、洗濯槽で洗い、脱水槽に移して脱水し、すずぎのためにふたたび洗濯槽へと、数分ごとに洗濯物を行き来させなければなりません。放っておこうものなら、洗濯物はいつまでも石けん液の中をゆらゆらと漂っているだけです。これでは洗濯になりません。水道の栓の開け閉めも自分で管理しなければなりませんから、洗濯の間うっかり洗濯機のそばを離れることもできません。

それに比べて、なんと言っても全自動です。洗濯物を放りこんで洗剤を入れ、スイッチをセットすれば、次に洗濯機のそばに来るのは洗いがった合図のあと。数十分は、別のことに集中できます。全自動の底力に感心するとともに、洗濯中の時間が有効に使えて、うれしかったものでした。

かつて「自動」は生活における技術の進歩を象徴するキーワードとして、無条件に輝いていました。

自動ドア、自動販売機、自動巻き腕時計、自動変速装置、自動改札

二

なんとも勝手なものです。でもこれは、人間が持っている「便利さ」に対する共通の心の動きなのかもしれません。ある家電メーカーの開発者は、新製品のセールスポイントとして取りあつかいやメンテナンスが簡単であることを強調すると、ユーザーからは「もっと簡単なものがほしい。」という感想が返ってくると話していました。どこまでも簡単に、どこまでも便利に。もつと楽に、もつと速く、もつと正確に、もつとたくさん、もつときれいに……。わたしたちがこのような「もつと」を持っているために、便利さはすぐに「インフレ」を起こします。便利なものが増えたり便利さに慣れたりすることで、便利さの価値が相対的に下がっていくのです。そして、意外と底の浅かった「自動の底力」にちよつと失望し、全自動洗濯機による洗濯は「軽減された家事」ではなく、「ふつうの家事」へと格下げされました。そしてはじめて手にしたときの目の覚めるような驚きやうれしさは、「全部が自動じゃない全自動洗濯機」への不満、もしくはあきらめへと姿を変えていきました。

三

新しい機械を手に入れて「A」を繰り返す。みなさんにも覚えがありませんか。

かつて、家庭に普及し始めたころの電話機は、留守番機能も、発信元表示も、リダイヤルも短縮ダイヤルも、ファクスもなく、もちろん写真を撮ることも、画像を送ることもできませんでした。色はまっ黒。ダイヤル式です。それでも、はじめて電話を設置した人々は、「なんと便利な機械だろう。」と思ったことでしょう。それが今ではどうでしょう。か。懐かしいけど不便な機械」です。よほどの風流人か、趣

機、自動現金支払機……。最近では、わざわざ「自動」と言わずとも、自動式の機械が増えています。オフィスビルなどでよく見かけるのは、利用頻度の低いトイレや廊下、エスカレーターなどで、人を察知すると「自動的」に明かりがついたり、作動したりする装置。自動は、わかりやすい技術の成果としてわたしたちの手間を減らすことに貢献し、これらを受け入れたわたしたちは、ひとりでに動く機械にちよつと未来的なイメージと先進的な優越感を感じていました。その「自動」の代表選手として登場した全自動洗濯機は、家事に大いに貢献してくれました。

一 ところが……。その感動も、ありがたみもつかの間のことだったのです。

「そこまでやってくれるのなら、もつともつと楽をしたい。」

全自動といっても、スイッチを入れ洗濯が終了すればそれで洗濯が完結するわけではありません。洗濯物を干し、乾いた洗濯物を取りこむという手間をめんどろと感ずるようになっていきました。

「いっそのこと、たたんでダンスにしまつてくれたら……。だつて全自動なんだから……。」などと、乾いた洗濯物を見るたびに思うようになりました。いささか極端な望みとは思いつつも、さらなる「便利」を求めるのは自然なことです。わたしは、二槽式洗濯機で洗濯槽と脱水槽の間で洗濯物を往復させたことなど、すっかり忘れていました。最近では、干すところまでやってくれる乾燥機能付きの洗濯機も出てきましたが、この便利さもやがてあたりまえのものになってしまふのでしょうか。

味的な意味合いがなければ、黒電話を使う理由はありませんし、回線は、高速で巨大な情報を処理することが求められるインターネットなど現在の通信事情にも合わなくなっています。携帯電話の普及は、持ち運べない「B」電話を「ふつう」から「不便」に降格させました。カメラも、デジタル式が登場し、かつてフィルム式の「写真機」をはじめて手に入れたときのうれしさは遠くかすんでしまいました。

四

わたしが子どものころ、新幹線は「夢の超特急」というキャッチフレーズをそのまま信じていました。世界に誇るスピードを持った「夢の」列車と言われましたし、今でも世界でトップレベルの鉄道技術です。名前もよかったです。あこがれをこめて、「あ、ひかり」だ!今度は『こだま』がくるよ。」と指さしたものです。

その憧憬は、数十年を経てこんな表現に変わりました。

* 愕然としました。

「夢の超特急の各駅停車化」は、新しく、すばらしく、歓喜に満ちて迎えられた科学技術が、聞き慣れ、見慣れ、使い慣れるに従って輝きを失い、「フツーの技術」になっていく様子をよく表しています。

6

便利な機器が並ぶ平坦な大地の上で「便利さ」というきわだった輝きが薄れていつてしまっているようです。

五

いくら洗濯のすべてを機械に任せたいからといっても、洗濯した衣類を着用して汚すところまで、「全自動」にお任せしたいとは思いません。なんだか変なことを言うな、と思われるかもしれませんがね。自動の機械を求めたとしても、逆にすべてが自動になってしまうことの

味気なさが生まれることもあります。

「便利」というのは、ほんの少しの動作で用事がすみ、思い通りの結果に変化すること、自分が行った動作に対して得られる結果が非常に大きいことです。ボタンひとつ、かけ声ひとつ、ハンドルとアクセルを操作するだけで、何百キロも移動できる、お金をやりとりするだけで食べ物が入る、力仕事や細かい手仕事をしなくてよい……。そんなことが「便利」の魅力です。ものごとが変化していく過程をじっと見たり、変化の度合いをコントロールする必要はなくなります。過程がどのようなものか知らなくてもすんでしまい、たとえ知ったところで、自分の意志を生かしたり、工夫する余地を見つけないなど、自ら影響を及ぼすことができない場合も多くあります。

自動を歓迎しながらも、一方でわたしたちは頭を使って考えたり、手を使って工夫してものを作り上げることを楽しいと感じる力を持っています。

六

現在のわたしたちが趣味として行っていることの中には、昔の人たちが生活のための生業として行っていたことが少なくありません。釣りやキャンプ、カヌーなどのアウトドア・レジャー、キノコ狩り、木の実拾い、日曜大工、陶芸や板金なども生活するために必須の作業。その中から環境を整えたり道具を作る技術が生み出されました。縫い物や編み物やパッチワークは、寒さや危険から身を守る衣服を作るのに必要でした。

「アウトドア・レジャー」ということばがあるのは、世界中でも限られた国だけだそうです。アウトドアを「レジャー」として位置づけ

ることができるのは、あまりにも便利さが進んでしまっていることを表しています。そして同時に、生活に手間をかけたり自分で工夫したりするのは楽しいことなのだと教えてくれているようにも思います。

もともと便利にと「多くの自動化」を求めても、やがてそのありがたみが薄れたり、味気なさを感じることもあります。自動化して楽をしたいというのも生活や未来を作っていくことのひとつですが、自動だけじゃつまらない、と考えるのも、未来のひとつです。また、便利さをお金で買うのもひとつの選択ですが、できるだけ多くの工程を自分の手で行うこともまた、創造的で楽しい仕事です。

（佐倉 統・吉田 ゆかり）

『おはようからおやすみまでの科学』による）

* 頻度：同じことが繰り返し起こる度合い。

* 憧憬：あこがれ。

* 愕然：ひどく驚く様子。

* 必須：必要なものの中で最も必要と考えられること。

問一 —— 線部 a～d の熟語の中で構成の異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問二 —— 線部 e～h のことばの中で働きの異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問三 —— 線部 4「の」と同じ働きをする「の」を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 雨の降る日が多い。

イ 桜の花が美しい。

ウ 兄は歩くのがはやい。

エ 彼は病気なのだ。

問四 —— A に入ることばとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 進歩と退歩 イ あこがれと失望

ウ 感動と落胆 エ 優越感と劣等感

問五 —— B に入る適切なことばを次の漢字二字を組み合わせて答えなさい。

着 定 設 別 固 置

問六 —— 線部 1「全自動」とありますが、この「全」を付けた意図を説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 今までの二槽式の不便さと比較している。

イ はじめて使ったときの優越感を表現している。

ウ すべてが自動であることをさらに強調している。

エ 便利になったことへの驚きの気持ちをこめている。

問七 —— 線部 2「かつて輝いていました」とありますが、これを説明した一文をこれより後の文章中から抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問八 —— 線部 3「そのことだったのです」とありますが、その理由を述べている部分をこれより後の文章中から十字以内で抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問九 ――線部5「フツ―の技術」とありますが、カタカナで「フツ―」と表現した意図を説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア あこがれていた夢の科学技術が、無残にも時代遅れになつてしまった無念さを表現している。
- イ 新しいものがいつまでも新しさを保ち続けることはできないという真理を、皮肉をこめて提示している。
- ウ とどまることなく利便性を求め続けていく、われわれ現代人の身勝手さを批判している。
- エ はじめの輝きが強かっただけに、その輝きがすっかり薄れてしまったことをより際立たせようとしている。

問十 ――線部6「便利なく薄れていつてしまっている」と同じ内容を説明している部分をこれより前の文章中から三十五字以上四十字以内で抜き出し、その最初の五字で答えなさい。

問十一 ――線部7「逆にあります」とありますが、この理由を説明している部分をこれより後の文章中から一文で抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問十二 ――線部8「自分のく見つける」とありますが、このことを端的に説明していることばをこれより後の文章中から五字以内で抜き出して答えなさい。

問十五 この文章の内容として正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人類が求め続けてきた理想の生活は科学技術の進歩によって実現されたのだが、われわれの限らない欲望は行き場をなくしている。
- イ 人間はどこまでも便利さを求めようとする身勝手さを持っていると同時に、手間をかけたたりすることを楽しむ部分もあわせ持っている。
- ウ 人々が生活に快適さを求め続けたために手間のかかる細かい手仕事はほろびてしまい、生産性を求める機械化がますます進んでいる。
- エ 人が生きるために行っていたさまざまな生業が科学の発達によってレジャーになってしまい、昔の人が持っていた伝統技術が後世に伝わらなくなっている。

問十三 ――線部9「世界中でも限られた国」とありますが、これを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 科学技術の進歩によって生活が便利になり、物事の過程も大いにしようという余裕が生まれてきた国。
- イ 科学技術のありがたみがすっかり薄れてしまい、未来に対する希望が見えなくなってきた国。
- ウ 科学技術の急速な発達に人々の生活がついていかず、昔のような手間をかけた生活にもどろうとしている国。
- エ 科学技術の底の浅さに気づき、便利さをもたらしめている機械への依存を断ち切ろうとしている国。

問十四 この文章を三つの段落に分けた場合、第二段落、第三段落の始まりはそれぞれどこですか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア	第二段落	一	第三段落	四
イ	第二段落	二	第三段落	四
ウ	第二段落	三	第三段落	五
エ	第二段落	三	第三段落	六

五

次の空欄ア～コに、例にならってそれぞれ適切なことばをひらがなで入れて慣用句を作りなさい。

例

鼻が
ひく
かい

腰が
ひく
い

顔が
イ
ア

胸を
エ
ウ

顔を
エ
ウ

首を
オ
カ

足を
カ
オ

頭が
キ
ク

腕が
ク
ケ

耳に
ケ
コ

あごを
コ
ク

国語解答用紙

平成二十六年入学試験（一次）

受験番号

番
氏 名

解

答

Figure 1. Schematic representation of the experimental design. The subjects were divided into two groups: the control group and the experimental group. The control group received a standard training program, while the experimental group received a training program with a focus on the specific skills required for the task. The results of the training program were compared between the two groups.

五			四				三				二	一	解
5 ケ	3 オ	1 ア	問三	問十	問六	問一	問七	問八	問四	問一	1	1	
						問二				問二	2	2	
									問五	7			
コ		イ	問四		問七								
	カ						問三	問九		8	3	3	
				問十一									
					問八				問六				
	4 キ	2 ウ											
			問五	問十二		問四		問三	問七	問三	4	4	
								問十		10			
					問九						(びる)	(く)	
	ク	エ				問五				11	5	5	
												(う)	
													得点

合